

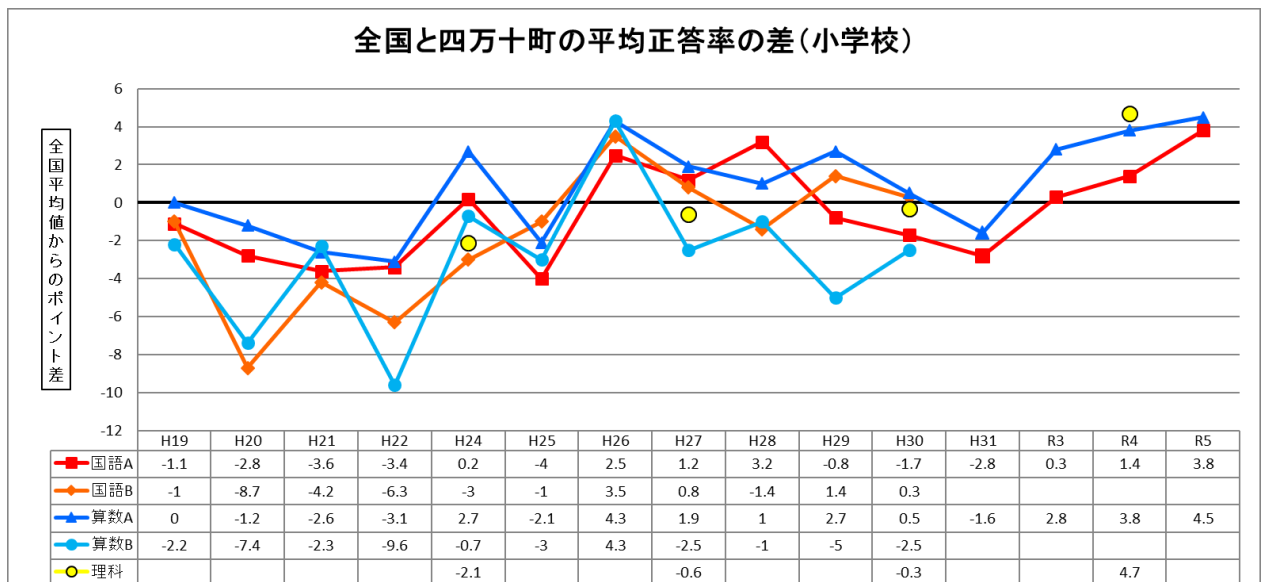
資料 3-2

第1部 四万十町の教育の現状

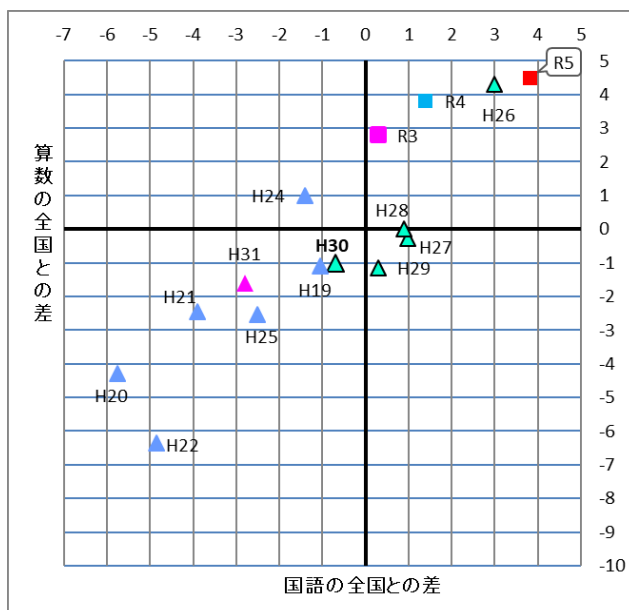
1 児童生徒の学力の推移

全国学力・学習状況調査は、小学校6年生と中学校3年生を対象に国語と算数・数学の学力と生活習慣や学習状況などに関する調査を毎年4月に全国一斉に実施しています。

平成24年からは、3年に1度理科についての調査が実施され、また平成31年からは、同様に英語の学力テストを実施しています。(平成23年は震災の影響により全国データなし。また令和2年は、新型コロナウイルス感染症の拡大により全国データなし。)平成19年から令和5年の全国学力・学習状況調査の結果は、下記のとおりです。

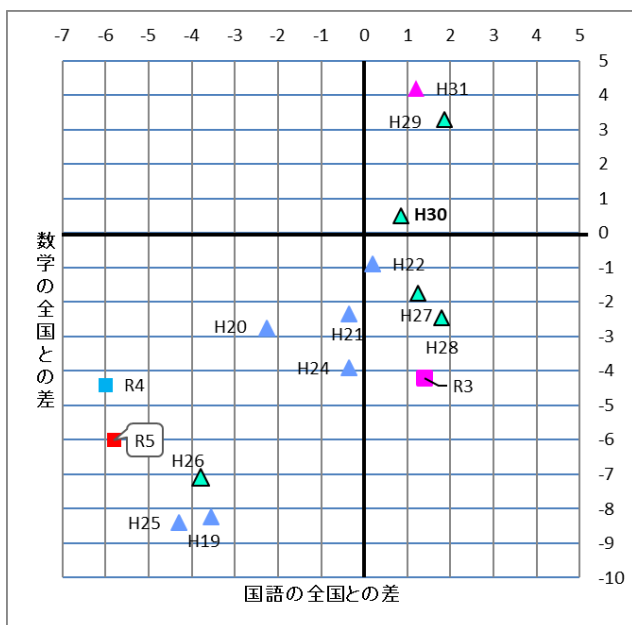
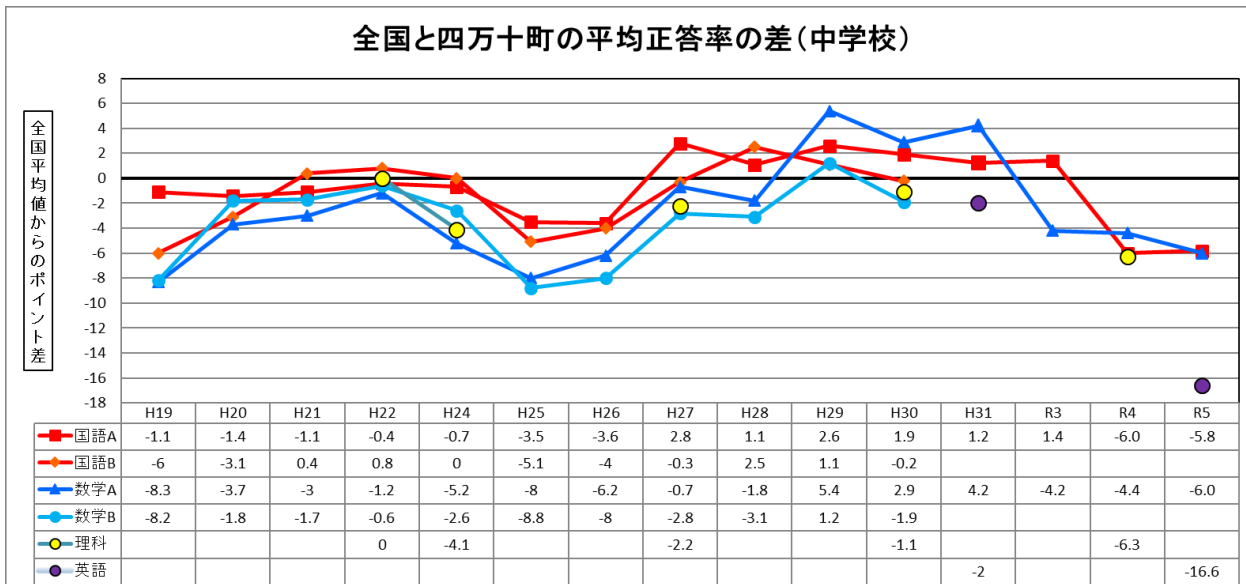


←【小学校：算数と国語の全国との差】



小学校における国語・算数を合わせた平均正答率は、平成26年の結果以降、年度によっては全国平均を下回る状況もありましたが、近年は、全国平均を上回る状況が続いており、各校で取組まれている「主体的な学び」や「資質・能力を育成するための授業づくり」の成果がこの結果につながっていると考えられます。

今後も、現況の水準を維持していくためにも、習得した知識・技能をどのように活用し、「課題解決」につなげていけるように、さらなる授業の工夫や改善を図ることが必要だと考えています。



← 【中学校：数学と国語の全国との差】

中学校における国語・数学を合わせた平均正答率は、平成25年の結果以降、少しずつ上がり、平成29年には、国語・数学とも全国を上回る状況にありましたが近年では、全国平均を下回る状況が続いています。特に3年に1度実施される英語については、全国平均を大きく下回っており、生徒が身に付けるべき資質・能力のさらなる明確化と授業における「主体的・対話的で深い学び」の視点に基づ

づく授業改善をはじめとする指導方法の工夫、改善をさらに図る必要があります。

また、児童生徒の学習状況として、「家庭学習の時間が少ない」との課題も浮き彫りになっています。学校と家庭が連携し、家庭学習の定着・充実や生徒の学習意欲の向上に努めるとともに、ICT環境の整備とその効果的な活用をさらに進める必要があります。

2 児童生徒の豊かな心の育成

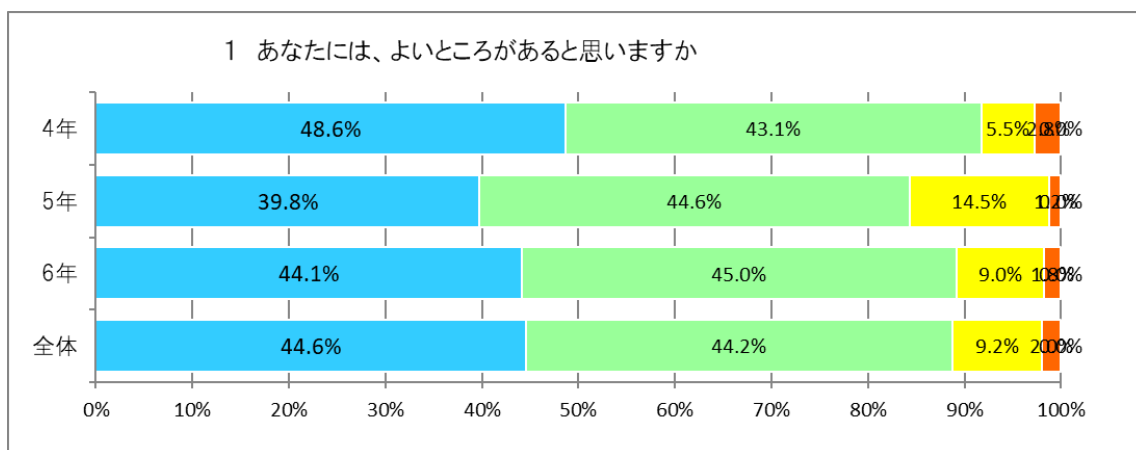
本町における不登校の出現率は、1,000人あたりの児童生徒数が全国平均を超えており、近年は、横ばいの状況で推移しています。一方、毎年新規の不登校児童生徒が出現しており、課題の解決には至っていません。

不登校の要因として、①「指導体制が不十分で、未然防止の取り組みが組織的にできていないこと」、②「児童生徒一人一人が主体的に活動し、自らの個性の伸長につながる取組が組織的にできていないこと」が考えられます。

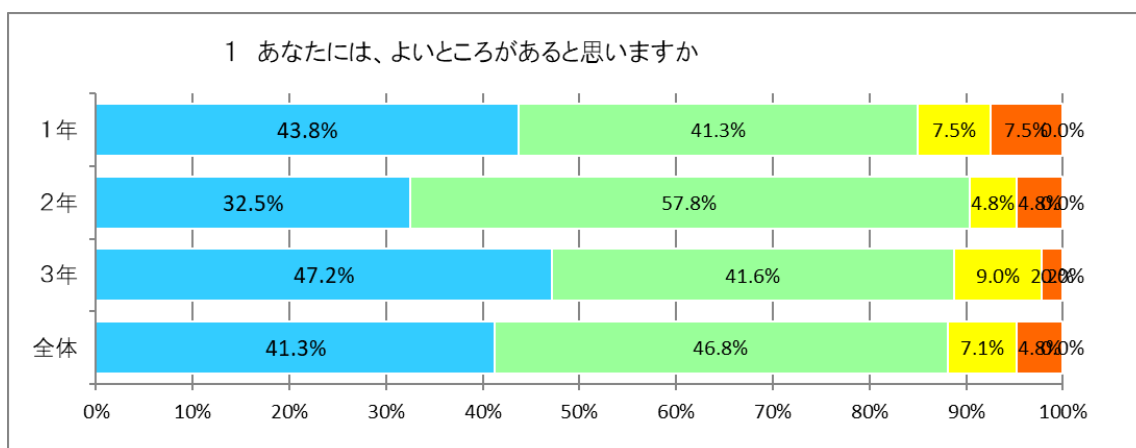
そこで、児童生徒にとって「安心・安全な学級・学校づくり」のために、「子どもたちが主体となる特別活動」の県指定事業を受け、令和3年より全ての小中学校で、取組みました。

下記が、令和5年3月に行った児童生徒の意識調査（小学校4年生から中学校3年生まで）の結果となっています。

【小学校】



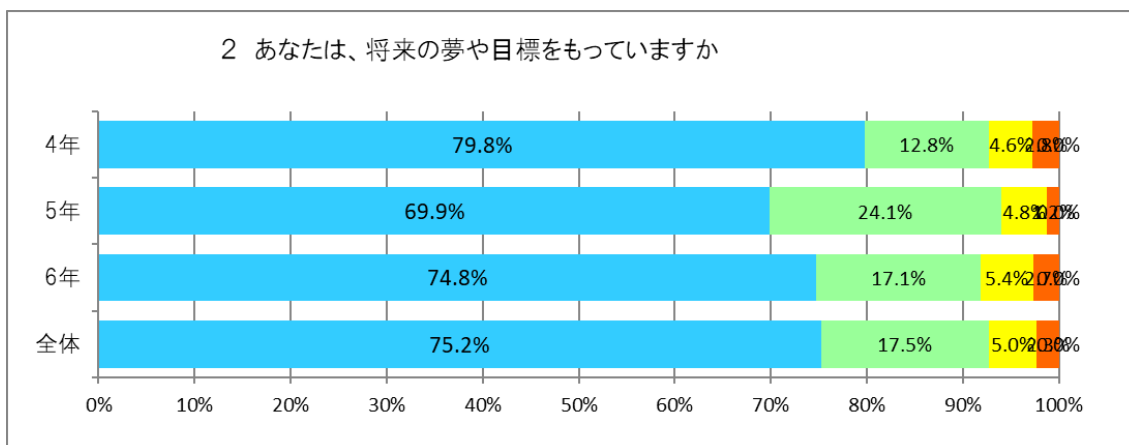
【中学校】



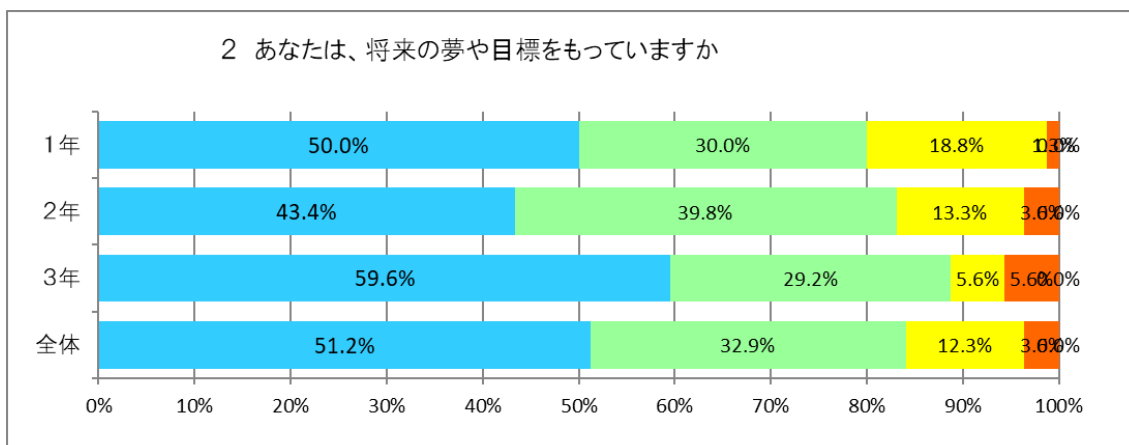
【グラフについて 水色：そう思う 薄緑色：どちらかといえばそう思う
黄色：どちらかといえば思わない オレンジ：そう思わない】

小中学校において、「あなたには、良い所があると思いますか」という問いに対して、小学校全体では88.1%が、中学校全体では88.8%が「自分には良い所がある」と回答している。特別活動では、学級での主体的な話合いや子どもたち自身が中心となって実践する機会が多くあり、そうした場面で活躍することが個性の伸長や自信につながり、自己肯定感が伸びた要因と考えられます。

【小学校】



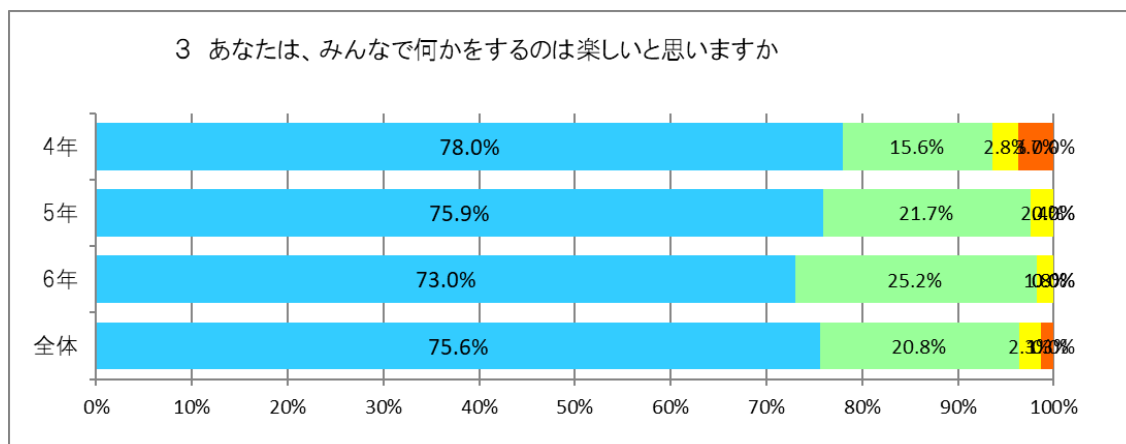
【中学校】



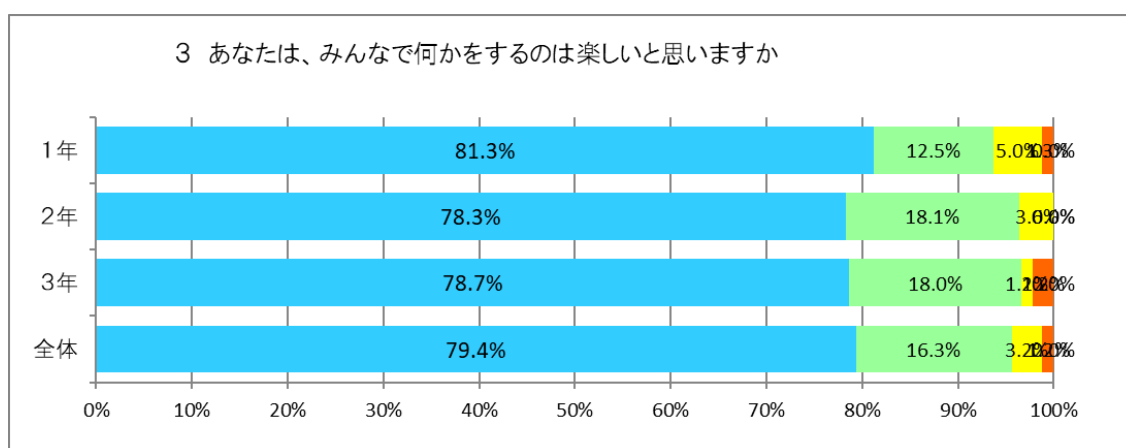
小中学校において、「あなたは、将来の夢や目標をもっていますか」という問いに対して、小学校全体では92.7%が、中学校全体では84.1%が「将来の夢や目標をもっている」と回答しています。

設問1の回答にあるように小学校・中学校ともに、自己を肯定的に捉えている割合が9割近くもあり、そのことが自分の良さや可能性についてプラスに考えられていることが背景にあると思われます。

【小学校】

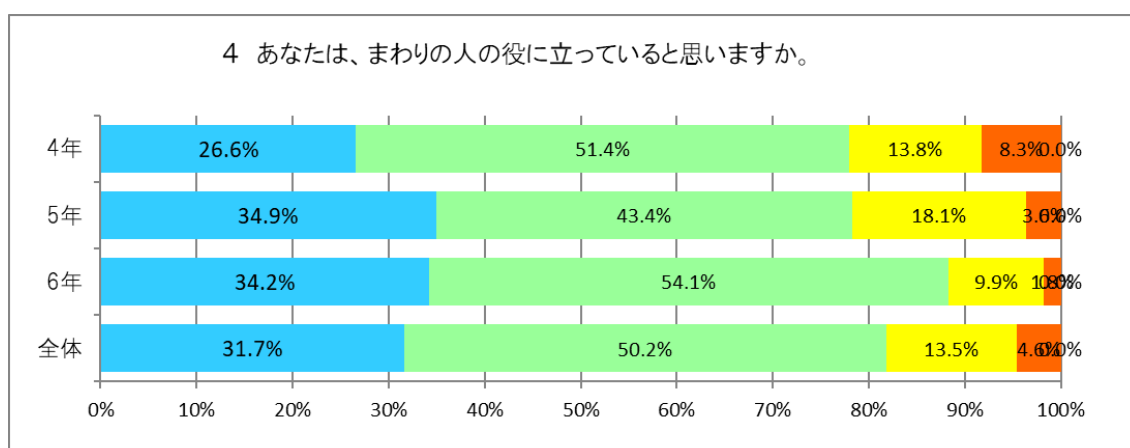


【中学校】

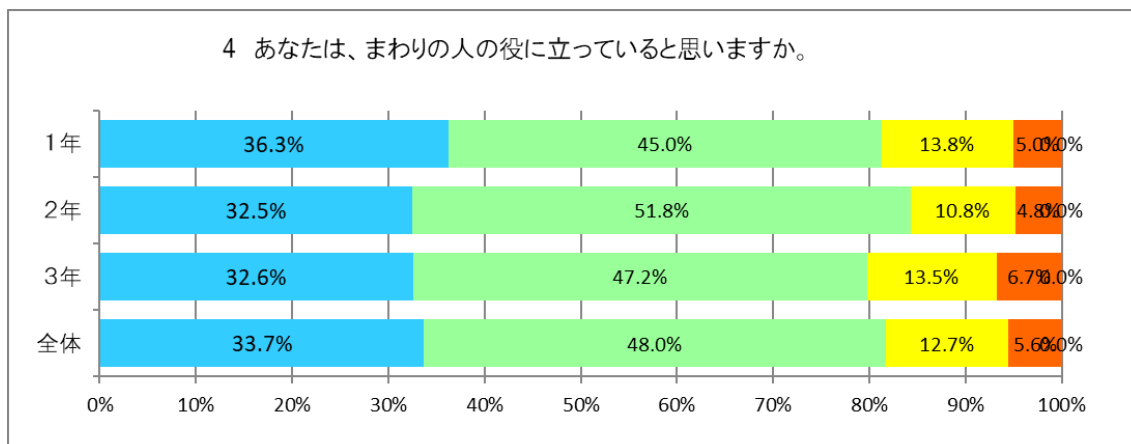


小中学校において、「あなたには、みんなで何かをするのは楽しいと思いますか」という問いに対して、小学校全体では95.7%が、中学校全体では96.4%が「みんなで何かをするのは楽しい」と回答している。特に小学校・中学校ともに、強肯定の割合が8割近くとなっており、特別活動の中で児童生徒が主体的に話し合い、友だちと協働しながら実践したことが背景にあると思われる。

【小学校】



【中学校】

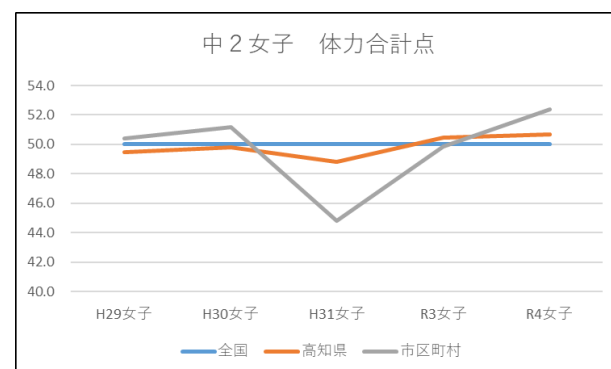
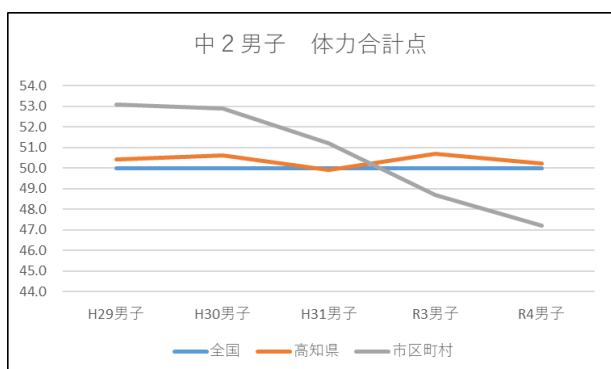
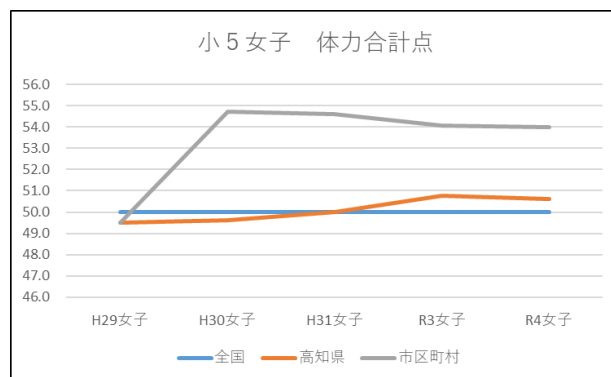
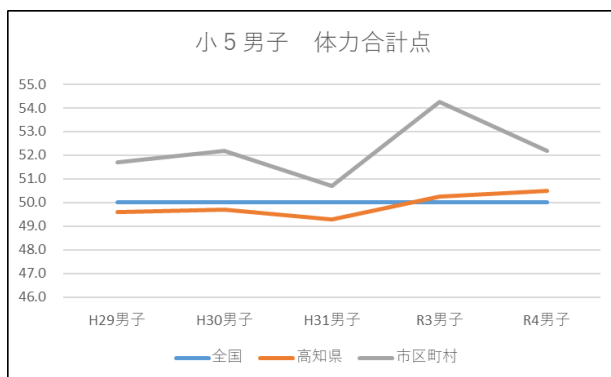


小中学校において、「あなたは、まわりの人の役に立っていると思いますか」という問いに対して、小学校全体では81.9%が、中学校全体では81.7%が「まわりの人の役に立っている」と回答している。

この問いについては、記述式による具体的な回答もあり、「授業の中で友だちに分からない所を教える時」や「困っている友だちを助けた時」、「掃除や係り活動で友だちを手伝った時」などと回答しており、学級・学校生活の中で、自己有用感を得ていることが分かります。

3 児童生徒の健やかな体の育成

【全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果より】



平成 29 年の調査以降、体力合計点は、小学校 5 年生男子、小学校 5 年生女子で、ともに県平均、全国平均を上回って推移しています。

一方、学校 2 年生女子については、令和 3 年以降、県平均、全国平均を上回っていますが、中学校 2 年生男子は、平成 31 年以降、県平均、全国平均を下回っています。

今後も全ての児童生徒が、運動の楽しさや喜びを味わうことができるよう授業改善や工夫を継続していく必要がある。